

## 遺児慰霊友好親善事業

### 日本遺族会・洋上慰霊

戦後七十周年記念事業として、去る三月一日から九日までの十日間、南太平洋上で実施された日本遺族会主催の洋上慰霊に本県南国市から参加された北村新一郎さんが参加されました。

一等主計兵曹として巡洋艦「川内」に乗り組み戦死された父、輪（とうる）さんへの追悼文が寄せられました。



### 追悼のことば

このたび洋上慰霊に参加するにあたり、お父さんとのことがいろいろ浮かび、思いのままお話します。

昭和十六年まで大阪の今福にいました。お父さんが自転車に乗り、釣りに行くその後から、三輪車をこいでついで行く僕の姿。洋食を食べながら、今のテレビに似た電光板のようなものを見ている二人の光景。お父さんとの最後の思い出となった、高知から佐世保の公園に行ったことも思い出します。あとは十八年の戦死の知らせでした。

お母さんと四人での生活で、お母さんが寝ている姿は見たことがありません。働き詰めの生活で、九十六歳でお父さんのところに行きました。私も中学校を終え大阪に出て六十の定年まで懸命に働きました。おかげでその間に妻を貰い、子も、義寿、

新治の二人、四人で幸せに暮らしてきました。

僕も今、七十九歳になりました。

お父さんの最後を迎えた戦場となったブーゲンビルの沖合いの海を見たと思います、今回の洋上巡拝に参加しました。

私も二人の子を持ち、その子が段々に大きくなるにつれ、可愛らしさが募ってくる毎日でした。

お父さんも幼子とわかれ、どんな思いで「川内」に乗り組み、南の海ソロモン諸島に向かい、そして戦ったのか、海上での思いはいかばかりであったろうか、そう思うことすら辛くなります。

これ以上はことばにできません。追悼のことばといたします。

平成二十八年三月

北村新一郎